

「教科教育法英語」を受講した学生の 模擬授業に対するフィードバックコメントの分析

猫田 和明

Analysis of Students' Feedback Comments Following Mock Lessons Performed in a Course Called "Methods of Teaching English in Elementary School"

NEKODA Kazuaki

(Received September 24, 2021)

1. 背景と目的

2017年11月に文部科学省が公表した「小学校教員養成課程 外国語（英語）コアカリキュラム」（以下、コアカリキュラムと呼ぶ）に基づいて、本学では、2019年度入学生から「外国語の指導法」と「外国語に関する専門的事項」に関する科目が導入された。本稿では、このうち「外国語の指導法」に該当する科目「教科教育法英語」（3年次前期：2単位）における実践を報告し、その中で行った学生の模擬授業に対するフィードバックコメント（以下、コメントと呼ぶ）の分析を通して、学生の授業の捉え方について考察するとともにその妥当性を検討し、今後の授業改善への足がかりとする。

2. コアカリキュラムに基づくシラバスの作成

コアカリキュラムの「外国語の指導法」の内容は、「授業実践に必要な知識・理解」と「授業実践」の2つから構成され、この中には「小学校外国語教育についての基本的な知識・理解」、「子供の第二言語習得についての知識とその活用」、「指導技術」、「授業づくり」が含まれている。また、学習形態として、これらの内容を教員による講義だけでなく、授業観察や体験、模擬授業を通して学習させることになっている。筆者はシラバスの作成にあたり、一般目標を「小学校の外国語活動・外国語について、学習指導要領の内容、国際理解教育との関係、言語習得理論を踏まえた指導のあり方について、講義と演習を通して理解する。その理解に基づいて模擬授業に取り組み、実践の基礎力を身につける。」のように設定した。この目標に基づいて次のような授業計画を作成した（表1）。各回のタイトルの後ろの括弧内には各回の内容に関する簡単な説明を付してある。このうち、第8回の内容は授業日程の都合で2021年度は単独で実施

できなかったため、他の回の内容の中に統合した。第1～9回が知識・理解を中心とする内容であり、第10回以降は指導者による模擬授業を体験した後、学生が模擬授業に取り組むという構成である。

表1 「教科教育法英語」の授業計画

1	言語活動とは何か（言語活動は何を意味しているのかを理解し、小学校英語指導に大切なことを考える）
2	学習指導要領のポイント（外国語活動と外国語の違いや、4技能5領域の目標と言語活動について実教材を見ながら理解する）
3	指導計画（単元構成と授業の組み立てについて活動の体験をしながら理解する）
4	題材内容を工夫した指導（特に地域・他教科・異文化理解と関連させた活動について活動の体験をしながら理解する）
5	ティーム・ティーチングとクラスルーム・イングリッシュ（動画の視聴を通してALTとのTTにおける指導者の役割を理解した後、教室英語の練習をする）
6	文字・読み書きの指導（アルファベット、音韻認識、聞く・話すから読む・書くへの展開方法について活動を通して理解する）
7	教材・教具（教材の研究と開発、ICTの活用について理解する）
8	子供の発達と言語習得（子供の発達と言語習得について理解する）
9	評価のあり方（評価の観点と方法について事例をもとに理解する）

10	授業体験（筆者による模擬授業を体験して授業のイメージをもつ）
11	模擬授業の準備と教材作成（教員は学生のグループ活動への支援を行う）
12 ～ 15	グループによる模擬授業の実施、コメント提出～（詳細は後述の「3. 模擬授業の実施とデータ収集について」を参照）

講義の実施にあたって留意したことを2点あげておく。第一に、初回の授業ですぐに学習指導要領の内容に入るのではなく、小学校英語に対して持っているイメージについて意見交換をさせた後、動画を視聴させ、授業づくりの中核となる「言語活動」という用語の意味について自分が描いていたイメージと比較しながら考えさせた。これにより、後に続く学習指導要領の内容を学習するモチベーションを高めることをねらいとした。第二に、知識から体験へではなく、第1～9回の中でも最初から体験を通して学習できるように、実際の教材や活動、あるいは動画を提示しながら講義を進めた。様々な活動の観察・体験に基づいて、後から抽象化された言説や理論を与える方が、英語を専門としない大多数の学生のモチベーション維持の観点からも望ましいと考えたからである。

本稿では、第12～15回のグループによる模擬授業の部分を取り上げて分析・考察する。それでも、シラバス全体を提示したのは、模擬授業に対するコメントに講義部分の影響が出てくることが十分に考えられるからである。

3. 模擬授業の実施とデータ収集について

2021年度の履修者は全員3年次生で126名であった。大人数クラスのため、クラス分けを行い、同内容の授業を2つ開講している。受講者は小学校教育コースのほか、幼児教育、特別支援教育、情報教育、教科教育の各コースの学生で構成されている。小学校教育コース以外の学生にとっては、小学校一種免許を取得しようとする者だけが必修科目となる。学生は2年次のときに附属学校で3年次生が行う教育実習の様子を数日参観した程度であり、自ら教壇に立った経験はない。この科目の開講期間中には副免許の取得を希望する学生の2週間のオプション実習があるが、全員が参加するわけではない。したがって、この科目を受講する学生は実習経験があってもごく限られた経験のみという学生達である。

模擬授業のグループは6名を基本とし、同じ教室に所属する学生を中心に21のグループを作成した。そのようにした理由は、学生間の連絡を取りやすくするとともに、各コースの学生の興味・関心、専門性を活かした授

業づくりにプラスに働くと考えたからである。

模擬授業は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の対策のため、大人数が入り乱れて活動するような状況を避ける必要があった。そこで、各グループのメンバー内で役割分担をして教師役と児童役を演じるなどの工夫をして、どのような教材で、どのような活動をするのかがわかるように、他の受講者の前で20分程度の実演をさせた。指導案の代わりとして、各グループで1つ、パワーポイントのスライドを作成してもらった。単元名、単元目標、評価規準を明記した上で、その単元の一部の活動（特に言語活動を含む部分）に必要な教材や活動の内容がわかるスライドを作成するように指示した。様式は、第10回の授業で筆者が行った模擬授業で使ったスライドを参考にさせた。模擬授業後、質疑応答の時間を5分ずつ設けて、分からなかった点や確かめたい点を中心に学生同士のやり取りを行わせた。コメント（100～200字）は本学の「修学支援システム」を用いて電子媒体で提出させ、筆者がそれらに目を通した後、総評を加えて受講者全員に公開した。学生が他の学生のコメントを見ることで、学びを深めることをねらいとした。模擬授業の評価にあたっては、（1）自分の考えや気持ちを伝える言語活動になっているか、（2）題材・教材の工夫が見られるか、（3）メンバー全員がチームワークよく模擬授業に貢献できているか、という3つの観点を設定して筆者が学生のコメントも参考にしながら評価した。

以下に、学生が設定した単元名の一覧を示す。筆者の講義と模擬授業の中で、児童が自分の気持ちや考えを表現できる言語活動のあり方とその重要性について繰り返し述べてきたことから、「助動詞canを使った活動」のような文法用語や言語材料を示しただけのタイトルはなく、言語活動にふさわしいタイトルになっていた。また、「地域・他教科・異文化理解」をキーワードとした題材内容の工夫について講義したこと、それを模擬授業の評価規準に明記したことで、これらのタイトルの中にはそれが反映されたものもあった。

- ・誕生日を伝え合おう
- ・ビンゴゲームで相手のできることをたずねよう！
- ・王・女王になろう（町づくりをして案内しよう）
- ・知りたい！みんなのこと
- ・My Best Memory 小学校での思い出
- ・Myカレンダーを作ろう！
- ・オリジナルカレーを作ろう
- ・ビンゴゲームで好きなものを伝え合おう！
- ・道案内をしよう
- ・お花屋さんを開こう

- ・徳山動物園にいる動物を紹介しよう
- ・山口市のおすすめスポットを紹介しよう
- ・将来の夢を伝え合おう
- ・見たいオリンピック種目を友だちに紹介しよう
- ・遠足にもっていくお菓子を選ぼう
- ・Let's make my original lunch box!
- ・応援したいオリンピック競技についてインタビューしよう
- ・突撃取材！夏休みのビッグニュース
- ・Let's go to Onigashima 鬼退治に行こう
- ・友達の住みたい国をあてよう
- ・好きなスポーツを伝え合おう

4. データの分析方法

学生が提出したコメントの総数は1,218件であった。これを研究論文の分析データとして使用することについては、本学の「人一般研究審査委員会」の審査により承認を得ている。

テキストに目を通したところ、同じ意味をもつ別の言葉として「子ども」「子供」「生徒」「児童」あるいは「先生」「教員」「教師」が混在していたため、それぞれ「児童」と「教師」に統一した。これをフリーソフトウェア「KH Coder 3」（樋口，2014）を用いて、出現語彙の集計を行ったところ、「ワークシート」「言語活動」という語彙が断片化していたため、これを強制抽出できるように修正した。一般的な意味で「活動」という言葉を用いる場合と「言語活動」では、表す意味に大きな違いがあるため、この科目で強調してきた用語として抽出した。その結果、総抽出語数（使用）は115,076（45,439）語、異なり語数（使用）は3,626（3,104）語、文のケース数は3,772であった。共起ネットワーク分析では、出現数による語の取捨選択に関して最小出現数を85に設定し、描画する共起関係の絞り込みにおいては描画数を60に設定して結果を得た。

5. 結果と考察

(1) 児童の活動について

抽出語上位50位までの結果を表2に示し、共起ネットワークを図1に示す。これらを見ると、上位には「思う」「児童」「活動」「授業」「感じる」などの頻度が高く、相互につながっていることから、学生は児童が授業の中で行う活動について思ったことや感じたことを多く書いていると思われる。その周りには、この講義を通して強調してきた「自分」の考えや気持ちを「伝える」ことができるような「言語活動」という言葉が出現しており、学生が模擬授業の中で言語活動をどのようにデザインするかを考える機会になったと思われる、望ましい結

果であった。また、それらの活動が「楽しい」ものになるような工夫をよく考えていたと推察できる。「思う」「感じる」「授業」は全体に共通して多い言葉のため、これら以外で上記のような言葉を含む個別コメントを探索してみると、「ゲーム形式にすることで自然と児童が積極的に活動できると思った。ただゲーム形式にすることの危険性や問題点があることを知り、言語活動にするためには私自身工夫を考えていく必要があると感じた。」（太字・下線は筆者。以下同様。）のように、ゲームのよさを認める一方で、それが言語活動としてふさわしい活動につながっているかを吟味する姿勢が見られた。例えば、「活動の中で例文をまねする口慣らしから自分の思いを伝える言語活動という流れができていたので良かったと思う。」や「ビンゴを活動に取り入れて児童が楽しめるようにするのは良いと思うが、ビンゴに夢中で会話が形式的になりすぎず、実際の会話に近い形で行えるように配慮することが大切だと思う。」というコメントに代表されるように、ゲームのための形式的な会話にならないよう意識することの重要性が述べられていた。そのためには自分の好きなことや考えたことを中心にして、単語や表現を選んでやり取りできる活動を豊富に用意することが必要である。

さらに、図1の左上には「興味」と「導入」のつながりが見られることから、言語材料の導入の部分で児童の興味を引きつけ、その後の活動につなげていくという視点が見える。個別コメントには、「絵本を使った導入によって児童たちの興味を高めることができたのではないかと思う。」や「スポーツの名前当てクイズやジェスチャーゲームなど、児童が興味をひく要素が導入部分で多く取り入れられていることから、児童を飽きさせない工夫が見られ、発音の確認や語句の定着に効果的だと思いました。」などがあり、絵本、クイズ、ゲームを使いながら印象的に言語材料に出会う活動を仕組むことができると考えていた。

(2) 異文化理解について

共起ネットワークでは、その他にもいくつかの言葉のかたまりが見られる。図1の右上にまとまっているのは異文化理解に関する言葉である。「日本」と「外国」の「文化」を比較しながら様々な国や地域のことについて「理解」を深めるといった内容があてはまる。

上記のような言葉を含む個別コメントを探索してみると、例えば誕生日を伝え合う活動に必要な月の名前（Januaryなど）を日本と外国の行事や風物の写真を用いながら導入したグループの発表に対しては、「外国のことばかりではなく、日本の行事や文化も押さえられていて、国際理解や他者理解に加え、自国の文化も大切に

表2 コメントの上位50位の頻出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
思う	2226	内容	223	難しい	145
児童	1222	工夫	208	用いる	145
活動	677	理解	206	少し	142
授業	677	行う	199	見る	141
感じる	659	楽しい	194	チャンツ	139
英語	518	練習	194	実際	139
良い	429	国	187	会話	132
考える	350	文化	186	理由	132
自分	337	聞く	185	ワークシート	128
教師	302	紹介	182	外国	127
使う	289	書く	176	選ぶ	125
動物	263	言う	173	伝える	124
単語	238	スポーツ	166	持つ	122
興味	230	表現	165	取り入れる	119
面白い	230	分かる	160	説明	118
クイズ	228	学習	157	道案内	118
言語活動	223	月	153		

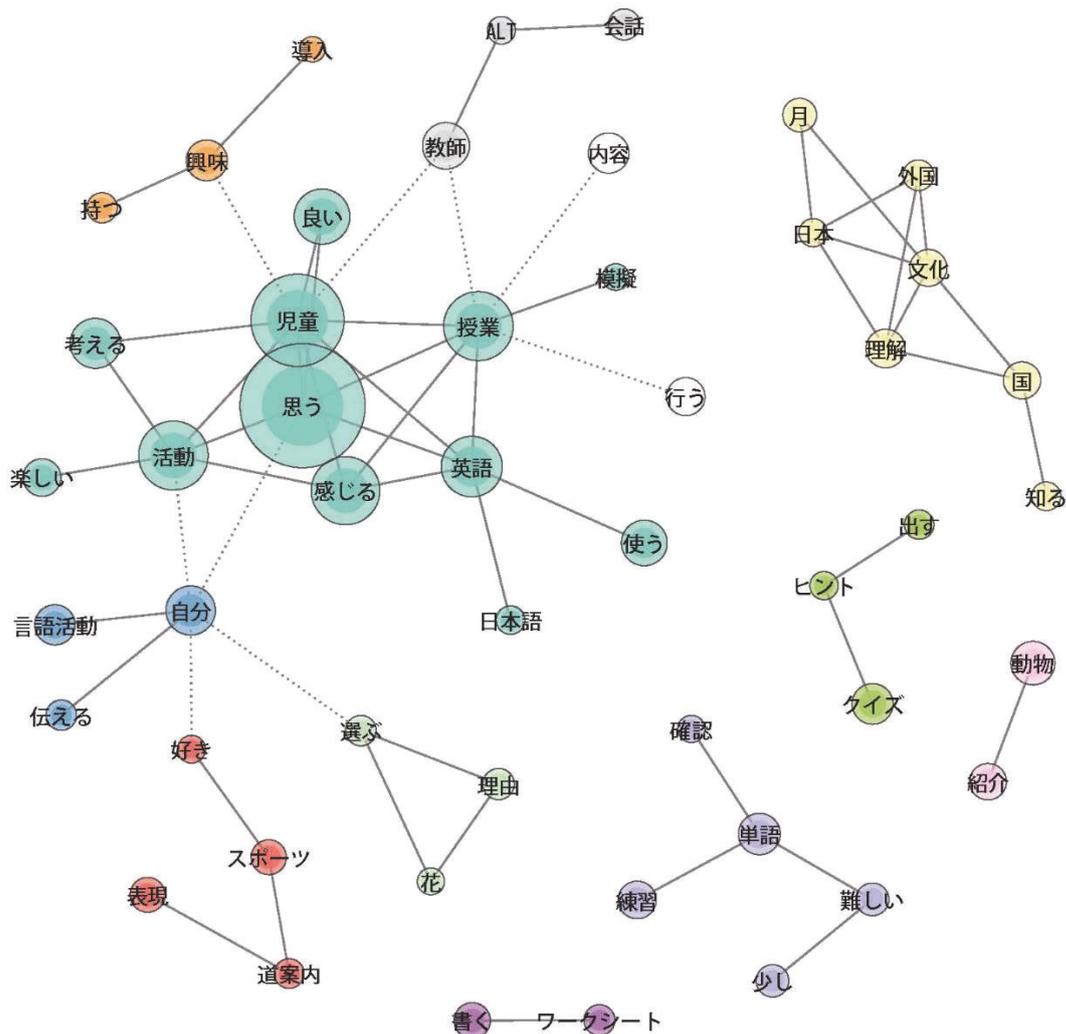


図1 共起ネットワーク

しようという意識をもてると思うのでいいなと思う。」
 「それぞれの月の日本の行事と同じ月にある外国の文化や行事についてのクイズをすることで、自然に異文化に触れることができ、驚きや面白さを味わうことができると感じました。」など、外国と日本を比較しながら提示することの意義や題材の活用方法について肯定的なコメントが多く見られた。一方で、教材の選択と提示について、単に外国のものを見ただけでは異文化理解にならないのではないかというコメントがあった。例えば、「月を連想するために、外国の写真を先に出し日本の写真を後に出していたと思うのだが、外国の写真を見せても月を思い浮かべることが出来ないのであれば外国の写真を扱わなくてもいいのかなと思った。異文化理解を取り入れるために無理やり入れたように思えてしまった。」
 「なぜチーズ等がその月を象徴するものとして登場しているのかについて疑問に感じた。それらを選択した理由はあると思うが、それを児童たちにも伝えなければ、本当に外国の文化に触れたことにはならないと感じた。」のようなコメントが代表的である。さらには、「紹介の活動が長くなったり、後の活動で扱う情報量が過剰になっていると感じたので、紹介する文化を3つにしたり、扱う月を12ヶ月全てではなくて今月と前後1ヶ月にするのはどうかと思った。」というコメントでは、活動の分量や単調さによる児童への負担に着目し、教材をどのように精選して提示するかという視点が見えてくる。このように、肯定的な意見だけでなく、批判的かつ建設的なコメントを含めて共有することが授業づくりの視点を広げてくれるだろう。

(3) ティーム・ティーチングについて

図1の中央上方には、「教師」「ALT」「会話」といった言葉のつながりが見られ、ティーム・ティーチングのあり方に関する内容が浮かんでくる。

上記のような言葉を含む個別のコメントを探索してみると、「ALTに実際に教師がインタビューする際の会話を聞く活動など、児童たちが英語をしっかりと時間をもう少し確保した方がいいかなと感じた。」
 「担任教師とALTの対話を聞くというのは、映像などを見るよりも親しみのある人が話しているのを聞くので、親しみが持てて聞こうと思えるような工夫であると思いました。」
 「クイズも児童の興味を引くことができると良かったと思ったが、教師との会話のやり取りがもう少しあれば良かったと思った。」のようにALTと教師が児童の前で実際に話しているのを聞かせることの大切さを述べているものがあり、これは筆者が講義において、「話すこと」の前に「聞くこと」の活動を十分に確保することが大切という説明をしたことに影響を受けたものと思われる。

また、「ALTとの会話を始める前に、「あとで何について話したか聞くね」と一言あると、児童がもっと主体的に会話を聞けるのではないかと感じました。」というコメントからは目的をもって聞くことの大切さが述べられていた。他に「ALTと担任の教師のやり取りがとても楽しそうだったので、児童たちの「自分も英語を話したい」という意欲に繋げることが出来たはずだ。」のような児童の動機を高める役割についてのコメントもみられた。

ALTとの交流の一貫として、例えば、「ALTの出身国で人気のあるスポーツの紹介をしてもらうなどすれば国際理解の観点を入れることができたのではないかと考えた。」
 「ALTに質問をするという場面の設定をすることで、児童が質問をしたいという気持ちできちんと必要な言語を使うと思うのでいいなと思った。」というコメントの他に、徳山動物園を模擬授業の題材に取り入れたグループに対するコメントでは、「児童が行ったことのある徳山動物園を舞台にALTに説明するという場面設定が児童の関心を引けそうだった。」というものがあり、ALTから一方的に教えてもらうのではなく、ALTに質問したり、児童のよく知っているものをALTで紹介する活動を行ったりすることで、双方向でALTとの交流が促進できることを述べていた。

(4) 言語の選択と使用について

図1の中央付近には「英語」「日本語」「使う」といった言葉のつながりがあり、英語と日本語を使う場面や使い分けに関する内容が浮かんでくる。

日本語の使用については、肯定的なものや否定的なものが見られた。肯定的なコメントの例としては、「指示を日本語に言い直しているのは、置いていかれる子がいなくなるのでいいなと思いました。」
 「英語の発言のあとに日本語での補足を行っていたので英語に苦手意識のある児童でも置いていかれることがないと考える。」のように、児童全員に理解させることを重視するコメントが多かった。もちろん、児童の理解を促進することは大切なのであるが、英語のあとに逐一日本語で言い直したり付け加えたりするのは、英語で理解しようとする児童のモチベーションの観点からも問題がある。講義では、児童が自分の力で英語の意味を推測することができる場面設定、視覚的補助、繰り返しなどの手立てについて説明していたのだが、学生の模擬授業ではその吟味が不十分なまま安易に日本語を使用する例も少なからず見られた。これは、学生の英語力の不足に起因する部分も大きいと思われる。

一方、日本語の使用に否定的なコメントの例としては、「英文を出してその文の意味を児童に答えさせる活動は、

日本語訳と同じことになるので必要ないと思う。」「英語を日本語に訳させるのではなくて、英文を聞かせ絵を見せて児童に意味を推測させるぐらいのレベルのほうが楽しく英語が学べるのではないかと思った。」「児童に動物の紹介をするときに、日本語で説明をしていたので英語に触れることができる活動が少ないように思いました。」「全体を通して英単語や英文の日本語訳が提示されていたが、イラストがあるなら必要がないのではないかと感じた。」のように、使い方によっては日本語の使用が英語学習の妨げになるというコメントがあった。これらは日本語を媒介として英語を理解することに疑問を投げかけており、このような疑問をもつことが、今後、日本語を使わなくても児童の理解を促進できる方法を検討する力になるだろう。例えば、「児童が日本語で言っている言葉に対して、自然に英語で教師側が返し、それを復唱させていて、無理に英語で言えていないことを否定したりしないのは大切だし、それができていてよかったです。」というコメントは、講義の中で述べた「リキャスト (recast)」の手法を念頭においたものである。講義の中で学んだ視点から授業を観察しているのは望ましいことである。

(5) 題材の選択について

図1の下方に広がっている言葉には、「スポーツ」「道案内」「花」「動物」など、学生が模擬授業で選択した題材を示す言葉が見られる。第3節で述べたとおり、この科目の受講者は様々な専門分野をもつ学生で構成されているため、題材のバラエティーは豊かであった。保健体育のグループはスポーツを、社会科のグループは道案内の地図に地図記号を、理科のグループは植物の生長を扱うなどして、それぞれの得意な題材を使って模擬授業を展開していた。また、同じ「動物」という題材でも、動物の鳴き声の表現あるいは地域の動物園と関連付けたグループもあれば、国語・英語のグループは「桃太郎」のストーリーを使って、鬼退治に連れて行きたい動物を選んで理由とともに伝えるというユニークな活動を提案するなど、題材を子供の興味・関心と結びつけるための創意工夫が見られた。

題材を示す言葉が含まれたコメントを探索してみると、「スポーツに関する時事を取り扱い、オリンピックをメインにしていることによって、応援したいスポーツの得手不得手に関わらず多くの児童の興味・関心を引き出せるような言語活動となっている点が、とても魅力的だと思った。」のように、必ずしも身近な競技でなくても、時節に合った話題であれば児童の興味・関心を高められることを述べた肯定的なコメントや、「ジェスチャーゲームなどのスポーツ当てクイズはスポーツにそこまで

興味がない子も楽しく当てられる活動ではないかと思いました。」のように、動作と組み合わせて使いやすい題材への意見があった。スポーツを扱った模擬授業をしたグループの中には、児童が体育の授業で経験するものと関連付けたものもあり、これに対しては「スポーツは、基本的に体育の授業で行うもの（ポートボールなど）が多く、児童たちも親しみやすいと思った反面、小学校の体育の授業ではなかなか行わないもの（テニスや野球など）も習い事などでやっている児童たちもいると思うし、取り入れてもいいのではと思った。」のように、児童に身近なものを取り入れる視点からのコメントがあった。

地図記号を使って地域の道案内をしたグループに対しては、「社会科で用いる地図記号や、地域の地図を組み合わせた道案内であったため、英語だけでなく、地域理解や他教科との融合があり、身近に感じられる親しみやすさや面白さがあったと思いました。」「道案内に関する言葉をチャンツで楽しみながら学んだり、児童にとって身近な場所である山口市を案内することで児童が興味をもって主体的に学んだりすることができると思った。」など、題材のよさに関するコメントがあった。このグループは、日本の一般的な地図記号だけでなく、国土地理院が作成した外国人向けの新地図記号（コンビニエンスストアなど）も扱うことで、題材をよりおもしろいものにしようと工夫していた。

花の生長を見せて英単語を導入し、それを使ってお花屋さんでの買い物をしたグループに対しては、「英語の授業の中で花の生長という、生活科の「植物の栽培」や、理科の「植物の育ち方」といった、他教科の分野と組み合わせているのが良いと思いました。」「児童の身近にある花や理由が選びやすい花（季節の花など）にしてあったことで、言語活動を活発に行うことができるようになるため、良い工夫だと思った。」「花を選んだ後に、その花を選んだ理由も付け加えて話させていたので、コミュニケーションにおいて一種の即興性がうまれていて良いと思った。」などの肯定的なコメントがあった。また、「花を貼り付けたワークシートは見栄えがよく、人に見せたいような構成になっていると思った。」という目に見える成果物の魅力に関するコメントや「花を集めた後に花束を作ってプレゼントするというのも面白いと思った。」という自分のアイデアを書いていた学生もいた。誰かのために花束を用意するという場面設定をすることは、児童の活動目的をより明確にするという意味で、言語活動の趣旨に沿った望ましいものであると言える。

動物の日英の鳴き声表現の比較や地域の動物園を扱ったグループに対しては、「単に動物の名前だけで終わるのではなく、色や大きさ等に着目し、かつ鳴き声を通し

て異文化理解に繋げている点が良かった。」「社会見学の経験と学びをつなげることで子どもの興味を引き出すことができ、地域の施設を紹介するというテーマが地域に親しみが持てる単元になっているのでいいなと思った。」という肯定的なコメントが多かった。折角のアイデアをより活かすために、「徳山動物園を紹介するんだったら動物園の地図を用いて、場所ごとに紹介するような活動も考えられると思います。」「徳山動物園を出した良さを生かすための考えとして、人気の動物を取り上げたり、その動物につけられている名前を紹介したりするのもいいのかなと思った。」「ALTの先生に伝えるという活動の際にはクラスで徳山動物園おすすめマップみたいなものを作り、紹介するという手もあるなと感じました。」など、より題材を活かすための提案を含むコメントが見られた。

桃太郎のお供の動物を選ぶというアイデアを披露したグループに対しては、「桃太郎を題材にすることで子供が興味を持ち、楽しく意欲的に学習することができる。どの動物を連れていくのかを考えるための選択肢を与え、その動物の良さも教えていて子供たちが選択しやすいようになっていた。」「3匹のお供の組み合わせ方に注目する子どももいるかもしれないので、例えば一番攻撃力が高いお供の組み合わせをグループで作って発表するなど、子どもたちがお供となる動物を選ぶという活動にもう少し広がりがあると、コミュニケーションの場面が増えていいかなと感じた。」など、子供の知っているお話を用いることで英語への抵抗を少なくできることや、目的をもたせて活動させるための工夫についてのコメントがあった。全体として見れば、上記のような発想豊かなコメントができる学生ばかりではないが、英語が専門でない学生が多いからこそ単語や表現などの言語材料を教えることだけにとらわれず、自由な発想で題材を考えている傾向があるように思われる。

(6) 教材の活用について

図1には「クイズ」「ヒント」「ワークシート」など教材の活用に関する言葉が見られる。教材の活用については特にワークシートへの言及が多く、「ワークシートは、お手本が上を書いてあって、児童にとって非常にわかりやすく、書きやすくなっていると思った。」「補助プリントに四本線がきちんと印刷されており、その点においては小学生向けのワークシートを作成することができていたと思う。」「ワークシートとパワーポイントの不一致は児童たちにストレスなので、そういった細かい部分への配慮ももう少しできていればよかったですと感じました。」など、提示の仕方も含めて、英語を無理なく書くことができるような手立てに関するコメントが多く見

られた。

一方、話すことの活動で陥りがちな、書いてあることをそのまま読むだけの会話にならないための手立てとして、「会話が定型文になっているため会話が広がらないので、ヒントとなる語句や表現だけをワークシートに載せ、自由に会話させると良いと思いました。」というコメントがあり、本物らしさという観点からは、「ワークシートの材料に丸つけをしようと言っていたが、カードを用意して実際に渡した方がより本物のお店屋さんに近いかなと思った。」のように、お店屋さんなら、実際に物をやり取りする形の方が児童のイメージがわかりやすいというコメントがあった。いずれも、話すことの指導では大切な視点であり、ワークシートをどのように使うかが児童の活動の質に影響を与えることを意識しなければならない。他には、ワークシートを成果物として共有する方法として、「夏休みの体験は、児童1人1人の本当の情報であり、せっかく「夏休みのビッグニュース」という魅力的なテーマなため、ニュース番組形式やワークシートを教室の一角に掲示板として貼り出すなど、代表者だけでなく全員が発表できる場があると、充実した授業になると感じた。」というコメントもあった。

クイズ形式は、小学校の現場で多用される方法であるが、模擬授業でも様々なクイズを用いて単語を導入するグループが多かった。学生からのコメントは大きく分けて、内容に関するものと提示の仕方や扱い方に関するものとに区分される。内容に関するものには、「Who am I クイズで動物や有名人、教師を入れるのは児童の興味・関心を惹きやすく楽しそうでした。」「月を当てる クイズの ヒントとして外国の文化の写真を挙げていることが多くの文化に触れることができ、興味をもつことができました。」「自分のことを全体への クイズとすることで、お互いのことも知れるため面白いと思いました。」などがあった。提示の仕方や扱い方については、「クイズを出すときにも文章で書かれている ヒントはあえて勘違いしやすいものだったりすぐには答えがでないものをヒントにしているような工夫があると思いました。」のように、すぐに分かっただけで終わらないようなヒントの順番を考慮することや、「ここはどこでしょうという クイズを、ヒントを出しながらだんだん写真が見えてきたり増えていくというのが、児童にとって、楽しく盛り上げられると思いました。」のように教材に動きを加えることの効果についてのコメントがあった。

クイズを使用するときには注意すべき点としては、「12か月ある月について同じテンポや流れで クイズをすると少し飽きがきてしまうのかなと思いました。」「月の クイズが12個あると、終わるころには単語を覚えていないと思うので、同じように異文化理解に繋がられ

るようなもので、写真を並べておいて線でつなぐなど、一気にできるクイズをしてもいいかなと思った。」のように、活動が単調になっていないかと言う視点は、授業者が教材を作成しているときには気づきにくく、児童役になって実際に模擬授業を受けてみるとよくわかる部分であろう。また、クイズに正解したら終わりというのではなく、「最初の動物当てクイズで正解の動物が出た後に、全員で出てきたヒントを読み直しているところが、今回の授業で使うものを意識させているようでいいなと思いました。」とのコメントがあった。クイズに答えることだけが目的化してしまわないように、クイズで出てきた単語や表現の発音や意味を児童に思い出させながら復習し、次の活動につながる扱い方をすることが大切であろう。

(7) 難しいと感じるもの

図1の「難しい」という言葉は2つの異なる文脈で使われていた。1つは、児童にとっての単語や表現などの言語材料の難しさ、もう1つは、学生が模擬授業を通して感じた難しさである。

児童にとっての難しさに言及したコメントには、「言語活動で使用する文章が少し複雑で長いように感じ、小学生には難しいのではないかと思う。」「児童同士が話す場面で、立って話しながら聞き取った単語を書きとるとするのは、馴染みのない単語であると特に難しいのではないかと感じました。」といった単語や表現に関するものと「メトロノームを取り入れた活動はリズム感が出て良いが、リズムが速いと児童にとっては大変難しくなるので、テンポを考えた方が良いと思う。」といったスピードに関するものが見られた。

学生にとっての難しさに言及したコメントには、まず言語活動の仕組み方に関するものとして「実際に外国語の授業を考えてみて、小学校のレベルで言語活動を取り入れた授業にすることが難しいと感じた。」「条件設定をすることによって、言語活動の価値が薄くなってしまわないようにすることも教師の工夫が必要で、折り合いが難しい部分だと思った。」などがあり、その際に使用する言語材料について、「児童たちの夏休みの思い出はたくさんあるので、教える表現をどのような工夫で絞ればよいか難しかったのが課題でした。」「模擬授業を行ってみて、言葉選びの難しさを感じた。使いたい単語があっても、児童には難しいであろう単語がいくつもあった。」のように言語材料の選択に苦心した様子がうかがえる。中には自らの経験から「自分が小学生時代を思い出した時に、難しい名前のものは選びたくないなという気持ちがあった。」という使用回避(avoidance)の傾向を述べているものもあり、子供が

自信をもって使える状態になるよう支援していくことの大切さを感じていると思われる。

他には「取り入れたい活動や、工夫したい点が多く挙がったため、それを一つの目標の元でブレなくまとめるところが難しかった。」という目標と活動の一貫性にふれたものや「ワークシートで書く活動、ペアでの話す活動の2つの活動をいれたが、評価の方法をしっかりと明確にしておかなければ難しいと授業を考えているときに感じました。」のように単に活動するだけでなく、それをどう評価するのかという視点からのコメントもあった。これらは数としては多くなかったが、授業づくりの重要な視点を捉えることができている。

また、「児童の反応を予想することの難しさを実感しました。今回はスムーズに返したけれど、本来ならば話がそれたりして、もっと時間がかかるのだろうなと思います。」など、児童の反応予測という模擬授業では最も実感を伴って学ぶことが難しい部分についてのコメントがあった。また、模擬授業全般について「他の学生に見せる言語活動ということで、なかなか実践方法が難しく感じられた。他の学生から質問を受けて、思いもよらない欠点やこの活動方法の穴が見つかった。児童を相手にすると、また課題が見つかるだろう。」というコメントがあり、学生同士の模擬授業は実際に児童を相手にする場合とは異なるという限界を感じながらも、他の学生からの質問や意見を聞くことによって初めて気づく部分もあるというメリットをあげていた。児童の反応を妥当なレベルで予測できる力や多角的な授業改善の視点をもつことができる力は、実習での観察や経験を経て、何回か模擬授業と授業検討会を繰り返すことで伸ばしていくことができると考える。

6. 学生のコメントの妥当性の検討

模擬授業に対する学生のコメントは、内容的にどの程度妥当なものなのだろうか。出現語彙とそれを含む個別のコメントを検討してきた結果からは、実践経験が乏しい学生でもかなり幅広い視点からのコメントを書いているように見える。もっとも、教育学部3年次の学生は1年次のころから教職科目を履修していること、2年次でも英語以外の教科の指導法を学んでいる場合があること、少ない機会であっても学校体験をしていることから、おそらく、授業実践に関わる視点は3年次当初の時点でかなり知識として持っていると推測できる。本節ではその妥当性を検討するために参照する資料としてJACET教育問題研究会(2021)を参考に考えてみる。同資料の説明によると、『小学校英語指導者のポートフォリオ』(略称: J-POSTL エレメンタリー)とは、「小学校で英語教育を担当する先生方や小学校教員養成課程で学ぶ

表3 「J-POSTLエレメンタリー」における「授業計画」と「授業実践」の記述文（教職課程履修生用のみ）

（JACET教育問題研究会, 2021, pp.30-40）

授業計画	授業実践
<p>A. 学習目標の設定</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童のニーズ、興味・関心を考慮し、学習指導要領の内容に沿った学習目標を設定できる。 ・年間の指導計画に即して、単元や授業ごとの学習目標を設定できる。 ・児童の意欲を高める目標を設定できる。 ・児童が自分の学習を振り返ることができるような目標を設定できる。 <p>B. 授業内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童のやる気や興味・関心を引き出すような活動を設定できる。 ・児童がこれまでに学習した知識を活用した活動を設定できる。 ・児童の反応や意見を授業に反映できる。 <p>C. 授業展開</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習目標に沿った授業形式（一斉、個別、ペア、グループなど）を選び、授業を設計できる。 ・児童同士のやり取りを促す活動計画を立案できる。 ・児童の発表を促す活動計画を立案できる。 ・英語を使う場面、方法、タイミングを考慮して、授業を設計できる。 	<p>A. 授業案の使用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童の興味・関心を引きつける方法で授業を開始できる。 ・個人活動、ペア活動、グループ活動、クラス全体など、状況に応じて学習の形態を柔軟に調整できる。 ・授業案に基づいて柔軟に授業を行い、授業の進行とともに児童の興味・関心に対応できる。 ・児童の集中力を考慮し、授業活動の種類と時間を適切に配分できる。 ・本時をまとめてから授業を終了することができる。 <p>B. 内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業内容を、児童の持っている経験、知識、身近な出来事、文化などに関連づけて指導できる。 <p>C. 児童との交流</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童中心の活動や児童間の交流を支援できる。 ・授業開始時に、児童が授業に注意を向けることができるように指導できる。 <p>D. 授業運営</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個人学習、ペア活動、グループ活動、クラス全体などの活動形態を工夫できる。 ・フラッシュカード、図表、絵などの準備や視聴覚教材を活用できる。 ・ICTなどの教育機器を効果的に活用できる。 <p>E. 教室での言語</p> <ul style="list-style-type: none"> ・英語の教科内容や学習の方法などを、視覚的ヒント、ジェスチャー、デモンストレーションなどを利用して英語で指導できる。 ・英語を使って授業を展開するが、必要に応じて日本語を効果的に使用できる。 ・児童が授業活動において英語を使いたくなるように設計し指導できる。

履修生が、自らの専門性を高め、成長するために活用する「リフレクション・ツール」であり、「小学校における英語教育に必要な指導法の知識や技能がCAN-DO形式の記述文で明示」されている。7つの分野にわたり167の記述文が示されているが、本稿では模擬授業のコメントを分析するという目的から、「授業計画」と「授業実践」の分野にある記述文から教職課程履修生用として示されているもの（表3）だけを取り上げて考察してみる。授業計画の「A. 学習目標の設定」については、本稿

で使用したデータでは「目標（めあて）」という言葉の頻度は全体で32回であり、その目標と密接な関係にある「評価」という言葉の頻度は56回であった。これは上位50語の頻度（表2）と比較するとかなり少ない数である。模擬授業の実施にあたっては、単元目標と評価規準をスライドに明記させ、それに基づいて活動を考えるように意図的に指示していたにもかかわらず、そのことに関するコメントは比較的少なかったことになる。竹内（2020）による授業観察をする際の着眼点の調査では、

いわゆる教員の卵はベテラン教員に比べて、明確な目標に基づく活動の選択への意識が低いこと、学生が経験したことの無い評価の視点は意識にあらがりにくいことが指摘されているが、これと同様の傾向が見られた。前節において、学生が「難しいと感じるもの」の項で示したコメントの中には、目標や評価と活動との整合性に関するものは存在しているものの、全体としては主要な視点にはなっていなかったと思われる。なお、「J-POSTLエレメンタリー」において評価の分野は独立して設定されているが、そのほとんどは初任教員用 (novice) 以上の資質として位置づけられていることから、目標―指導―評価の整合性をとることへの意識と実践力は時間をかけて育てていく必要があると思われる。

授業計画の「B. 授業内容」と授業実践の「B. 内容」の領域では、児童の経験や知識、興味・関心に応じて題材を設定し、指導できる力が述べられている。今回使用したデータでは、前節の「(2) 異文化理解について」と「(5) 題材の選択について」の項において、地域・他教科・異文化理解などの要素を活用して、児童が興味をもてる内容になっているかという視点から多くのコメントを書いていた。それらは単に、これらの要素があっただけというコメントではなく、その利点や問題点を指摘したものや、このようにしたらさらに題材が活かせるのではないかという建設的なものも多く見られたことから、妥当なレベルで検討できていたのではないかと思われる。英語が専門でない多様なコースの学生が集まるこのようなクラスでは、特に題材内容についてはお互いの発想から多くを学ぶ機会になったのではないだろうか。

授業計画の「C. 授業展開」は授業実践の「A. 授業案の使用」「C. 児童との交流」「D. 授業運営」「E. 教室での言語」を含む幅広い概念を含んでいる。このうち授業実践のA、C、Dの領域について、模擬授業の場合は相手が実際の児童ではないため、相手の反応にあわせて授業案や時間配分を柔軟に運用する場面が生まれにくく、学生は基本的にグループで考えた計画通りに、役割を交代しながら授業を進めていた。また、6名のグループ内での20分程度の授業実演を他の学生が観察する方法をとったため、状況に応じて活動形態を柔軟に調整する機会もあまりなかった。これらの点は今回の模擬授業の限界でもある。それでも、どのように言語活動を仕組むかという視点を模擬授業の評価観点に入れていたため、前節の「(1) 児童の活動について」の項にあるコメントの内容から、児童のやりとりや発表を活発にする手立てや、自分の思いや考えを伝え合うことのできる児童中心の活動や交流のさせ方を考える機会にはなると判断できる。また、教材に関しては、前節の「(6) 教材の活

用について」の項にあるコメントを見ると、特にパワーポイントで作成したクイズやワークシートの使い方についてのコメントが多く、主に絵や写真およびヒントの提示方法やワークシートに何をどのように載せておくべきかなどについて積極的に考えを巡らせていた。「スライド」という言葉の頻度は70回であったが、「板書」「黒板」「掲示」という言葉は合わせてもわずか15回しか出てこなかった。その原因は、今回の模擬授業の提出物がパワーポイントとワークシートであったことから、その出来映えに意識が集中したことによると思われる。本来は、黒板に書いたり掲示したりするべきことと、スライドで見せるべきことの使い分けを意識させる必要があるが、その点は不十分であった。

授業実践の「E. 教室での言語」についての内容は、前節の「(3) ティーム・ティーチングについて」と「(4) 言語の選択と使用について」の項における学生のコメントに表れていた。特に「必要に応じて日本語を効果的に使用できる」とはどういうことなのかについて、児童がわからなければすぐに日本語で補足するというような、必ずしも望ましい理解とは言えないものもあったが、コメントの内容からは、できるだけ児童が英語に触れる時間を確保しようという姿勢や、安易に日本語に訳すことへの疑問や抵抗感も見えるなど、様々な場面での言語選択のあり方について考える機会になったと思われる。また、「聞くこと」の重視や児童の意欲の喚起という視点から、教師がALTと英語で会話している姿を児童に見せることの価値に気づいており、コミュニケーションの相手としてALTを活用することで、児童が授業において自然に英語を使いたくなる場面を作り出せることを述べていた。

一方で、英語が専門でない多くの学生にとって小学校英語における言語の選択の問題は授業づくりの一番の難点になっているという印象を受けた。特に前節の「(7) 難しいと感じるもの」の項にあったコメントの中には単語や表現の選択について苦心した様子が多く表れており、児童にとってわかりやすい英語とは何か、どのような単語や表現を使えばよいのかと悩むことが多かったようである。これは学生の英語力が不十分なために、機械翻訳どおりの難しい不自然な英語表現を使ったり、伝えたい内容を児童が推測しやすいような簡単な表現で言い換えることができなかつたりすることによるものである。学生の題材の発想力が豊かである分、使おうとする言語材料が長く複雑で難しいものになってしまうという葛藤が見て取れた。この部分への対応としては、一般的な英語力を高めることも必要であるが、授業場面に密着した言語運用能力が求められる以上、模擬授業や実習の中で実際に使われている英語をよく観察し、実際

に使っていく経験を積み重ねることが近道であろう。

7. まとめと今後の課題

総合的に考えると、模擬授業は児童の反応とその対応については真正性に欠けるという限界もあるが、それに対する学生のコメントは決して的外れというわけではなく、むしろ、目指すべき方向に向かっているものが多く、これを学生間で共有して読み合うことは、貴重な学び合いの機会になる。また、模擬授業を通して考えたことを形に残しておき、必要なときに振り返ることができるリソースとして蓄積するという意味でも、意義あることであったと感じている。

本稿の内容は、模擬授業を実施・観察した学生のコメントに基づいている。しかし、それらを学内の修学支援システムによって共有はしたものの、各学生が実際にどの程度読んでいるかは不明であり、そこから何を学び、どのような変容があったのかということまでは追跡できていない。そのため、本稿の分析からは、学生がどのような視点から授業を見て何を考えたのかということまでしかわからない。学生同士のコメントの共有に確かな意味をもたせるためには、寄せられたコメントをもとに、自分たちのグループが行った模擬授業を振り返り、複数回の模擬授業を通して授業改善のサイクルを体験させることが理想的である。しかし、半期2単位の中で、しかも大人数のクラスでこれを行うことは難しいため、少なくともどのような授業改善を行ったらよいかを話し合ったりレポートにまとめたりする活動が必要になるだろう。

大人数のクラスで模擬授業を行うには授業時間に限りがあることから、グループ活動の形にせざるを得ず、一人一人の学生に対してきめ細やかな指導をすることが難しいというデメリットがある。しかし、大人数であることは、模擬授業の教材やパフォーマンスに対するフィードバックのコメントを大勢の受講者からもらうことができるというメリットにもなる。また、この科目は異なる専門分野や専門教科を学ぶ学生が受講していることから、多様なアイデアに触れる喜びや楽しみも大きかったことだろう。このように大人数であることはネガティブな要素だけではないため、メリットを活かすような取り組みを進めていきたい。

本稿のコメント分析から明らかなように、学生のコメントの中には、今後の授業づくりの根幹にかかわる重要な考え方や視点に言及しているものも少なくなかった。もちろん、コメントに書かれていることは必ずしもそれが実践できることを意味しないが、コメントを読み合うことによって、学生が自分一人では気づかなかった点に気づく経験が多くなれば、授業づくりの視点の広がりや深まりが期待できる。その知識や経験が実際に児童を前

にして授業を展開していくときのリフレクション・ポイントとしても機能することが考えられるため、教師を目指す学生が省察力を高めていくよい機会になるだろう。

参考文献

- 粕谷恭子（研究代表者）（2021）『「英語教員養成コアカリキュラムの検証と具体的・包括的プログラムの開発」報告書』（科研 基盤研究（B）18H00687）JACET 教育問題研究会（2021）『小学校英語指導者のポートフォリオ』（J-POSTL エレメンタリー）桐文社 <http://www.waseda.jp/assoc-jacetededu/>
- 竹内理（2020）「何に着目すればよいのだろうか—英語授業改善の具体的な視点を探る」浅川和也・田地野彰・小田真幸（編）『英語授業学の最前線』（pp. 73-91）. ひつじ書房
- 樋口耕一（2014）『社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して』（第2版）ナカニシヤ出版